至る。天正十八年（一五二一）始祖重実より此の地に至り歴世九代、年を経ること二百三十八年を以て滅ぶ（約四百年前）。其の後、真玉家は血縁者によって守られてきたものと思われるが、徳川三百年の泰平はこれらの由緒ある武士の末流を風化して全く百姓としてしまったのである。云々

また、井口家の三基については、応永三年（一三九六―室町期初期―）将軍義持、渋川満頼を九州探題・豊後守護職として下向の時、家臣井口秀発を遣わし、真玉家の使節とて其の栄を賀せしむ。永享十二年（一四四〇）十二月卒す時に八十才とある。

真玉氏九代統寛滅亡のことについては、次ぎようである。天正十八年、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めるにあたり広く諸大名に出陣の命を下した。統寛もまた大友義鎮の命をうけ、同月十二日真玉を発ち乗船のため竹田津へ向かう途中、香々地の長小野の峠に到ったところ急に家臣山田大蔵丞兼佐等が叛乱を起こし統寛は斬られて落命した。このことを知った後陣にあった重臣井口肥前守秀光は、急をきき馬を馳せて兼佐を討った。しかし、秀光は自分もまた統寛の近習二野主馬介正信に斬られるなどの乱闘の末、遂に真玉氏は滅亡したのである。

我が家の石造文化財は、記録等から何れにしても室町時代初期を下らない貴重な宝塔であると思っています。今後とも保存には十分に注意して大切に守って参りたいと考えています。

それらしきこと ―― 夢二と別府

大塚俊英

抒情画家として知られ、現在も多くのファンをもつ竹久夢二が、大正七年に別府を訪れていること、それを知ったのは、十数年前になる。小野茂樹著「別府と文学」を読んでから頭に残っていた。それがたまたま、昭和六十年に刊行した「別府市誌」の〈別府を訪れた文人墨客〉の項を依頼されたとき、夢二も当然私の執筆の中に登場してきた。私は、それ以来、夢二に関する資料をあつ

め、読み、整理していくうちに、遂には、小説まで執筆するというくだりになってしまった。夢二は、どんな理由から別府を訪れたのか、そして、別府で何をしていたのかと想い、夢二を作品の中で息づかせようと試みた。

夢二は、大正七年、八月の末から九月にかけて、別府に滞在している。日名子旅館に投宿していた。夢二は、当時、京都に在住し、彼の作家人生からみれば、もっとも充実した時期にあり、各種の展覧会の発表も好評を得、旺盛な活動をつづけていた。だが、夢二は、自分の作品に、更に新しい方向を求めようと試み、長崎に取材旅行に旅立つことを想い立ち、妻の彦乃に心境を語る。病弱の彦乃は、夢二を旅立たせ、独り留守を待つ自分に堪えられず、夢二のあとを追う。彦乃は長崎へは往かなかった。別府を訪れ、そこで夢二を待ち、夢二と連絡をとっていたが、別府に着くと間もなく、病が進行し、遂には病伏の身となる。連絡をうけた夢二は、仕事の途中で、長崎から別府を訪れることになる。

夢二の別府における足跡を記したものは少ない。彼の歌集「山へよする」の中に〈別府より〉という見出しで十首あまりの歌が掲載されている。

さにづらふ紅(あけ)の手絡(てがら)し新妻は別府の山に吾をまつとこそ

旅の身はかなしきものを、わが妻のまして恋ひつゝ吾を待つらむに

旅の夜に氷をわると吾があれば　遠方にして船の笛鳴る

などがある。

彦乃は結核を患っていた。資料では、彦乃は、中田医院に入院したとある。私は、中田医院なるものを調べてみた。大正時代の中田医院、現在の千代町のあたりにあったらしいという手掛りから、某日、この界隈を歩いた。いまは、医院らしいものはなく、流川通りから中浜筋に入り松原公園まで歩き、公園内を横ぎって、今度は、逆に、楠銀天街を流川通りとひきかえしているうち、銀天街のちょうど中ほどにさしかかったところで、私は、ふ

っと、気がかわり、銀天街と中浜筋をつなぐ、縦道に入った。縦通りはみじかく、すぐに中浜筋に出る。そこで仕方なく立ちどまった。ふとん店が目の前にあった。空地もある。駐車場になっている。「このあたりだがなあ」と思いながら空き地の右隣りに目をやった。そのときは、私も、周囲を注意深く観ていたのだろう。右方向に大正時代の建築物と想われる古びた木造建築の、しかも当時流行した横板壁をはりめぐらし、大きい窓を配し、玄関のドア、といった白い洋風造りの家屋が目に入った。「これは?」と想い近づいた。私は、その家屋を正面に見ているうちに何か確信めいたものが湧いてきた。空き家なのか、住人がいるのか、通りからはよくわからず、一見、空き家と見えるほどに人の気配は感じられなかった。私は、そのことがいつまでも頭にのこって仕方がないので次の日も訪れた。雨の日だった。雨傘を片手に、何枚も、道からその家屋の写真を撮した

このことを、友人の佐藤嘉一氏(本会会員)に話した。佐藤氏は、私の話にわざわざ、その町内におられる知人の方に、この家屋のことを話して下さった。それによると「大正時代の古いことは分からないが昭和初期に、私らがこの町内に居住していたときは、あの家屋は、中田医院でしたよ」とのこと。そして、そのあと、何代か別の医師が医院を開業していたらしい。中田医院は、戦前にはすでに代替りしていたのではないかとのことを知らせてくれた。私は、佐藤氏に感謝しながら、また訪れ、その家屋の外観と周辺の様子を取材して、彦乃が入院していた頃の医院を再現して小説に取り入れていた。ここからは、湊も近い。夢二が、彦乃の看病をしながら、遠くに鳴る汽笛をきいた

夜もあったろう。

それからまた一つ、別のことがらを紹介しておきたい。ことし、五月十一日から六月十七日まで、熊本県立美術館で「愛と青春の画譜・竹久夢二展」が開催されているとのこと、これも、佐藤氏からの伝言で知った。

私は、早速、訪れて拝見させていただいた。今回の展覧会は、下関市立美術館名誉館長河村幸次郎氏のコレクションの特別公開であった。夢二の愛と青春を抒情の世界の中に描きあげた作品の数々であった。油彩・水彩・日本画を中心に挿絵・デザイン・スケッチ・書簡など三百点であった。私は、展示作品の中に私の目に止った小品があった。それは、はがきくらいの紙にエンピツでのスケッチが二、三十枚あった中に、「橋のたもと」と題する川のスケッチが目に入った。「この風景は、朝見川ではないのか」と直感した。南小学校の前の道を通りすぎると朝見川にかかっている橋、浜脇へ通じるあの橋。直感がはしった私の目は、そのスケッチから離れなかった。—あの橋と川ではないのか、構図は、川に架かる木橋、橋脚のあたりに二、三の小さな川舟、右側の岸辺に大き目の民家が川に沿って並び、全体は、山手方向に目をやり、遠くに山が、かすかに見えるのである。「これは朝見川だ」と私は勝手に想い、何ども、題名をみたが「橋のたもと」だけで何も出てこない。夢二が別府に滞在中に描いたものではないのか。確かめようもなく私は朝見川の直感を残したまま会場を去った。だが、この想いを捨てがたく、この後、私は、朝見川のたもとでスケッチを試みる夢二の姿を、私の作品の中に勝手に息づかせようとしていた。

夢二と別府のこと。この稿は、研究ではなくエッセイである。「それらしきこと——夢二と別府」であるので本会の研究誌にはそぐわないかも知れないと想いつゝ夢を追ってみた。

夢二が別府を去った月日などの資料にも明らかでないが、その時期は、窓を開けると電線につばめがたくさん列をつくっていた頃らしい。「いでゝ見よかのつばくろの夫婦づれ。今日はうれしき鹿島だちすも」と、彼の歌集「山へよする」にある。